

天声人語

秋の夕暮れは、ときには郷愁を誘う。俳人の西東三鬼は虫の声を聞き、いわし雲の空を見ながら、小学生の頃の風景を胸に描いた。学校の上の城跡から鐘が鳴り響いたこと。暮れゆく空にカラスが胡麻をまいたように群れ騒いでいたこと▼鳴き声を聞きながら思い思って家に帰ったとも、隨筆にある。耳で目で肌で感じる夕暮れである。日を追うごとに夜が長くなる。それを植物たちも感じ取っていると最近知った。葉っぱが夜の長さをはかっていると植物生理学者の田中修さんが書いていた▼季節が変わることを前もって知り、花芽をつける時期を逃さないためらしい。太陽を浴びて光合成をするだけが仕事かと思っていたが、どうやら葉っぱを見くびっていたようだ▼いまあちこちで季節外れの桜が咲いているのも、葉っぱの仕事に関係があるといふ。この時期は、花芽の成長を抑制する植物ホルモンが葉から出ている。しかし、台風により塩分を含む暴風にさらされ、多くの葉が落ちてしまった。気温の高い日が続いたこともあり、花芽の成長が止まらなくなつた▼秋のさわやかな空氣のなかで桜の花が見られるのかなと思ふ、東京の目黒川沿いを歩いた。よく探すと1輪、2輪と白い花がある。ほとんどの花芽は、春まで待ってくれるのだろう▼季節外れの開花を「狂い咲き」という。植物たちの方がおかしくなつたような言い方で、かわいそうである。異常続きのこの国の気象に、私たちと同じように、木々も振り回されている。

2018・10・19